

第一回社会科理論研究会 J・デューイ「学校と社会（第1章、学校と社会の進歩）」

大和郡山市立郡山西小学校 島俊彦

「理論を持っていると、大胆な授業改善ができる。」という理念のもと、社会科理論研究会が始まった。テキストは「学校と社会（J・デューイ）」の第一章「学校と社会の進歩」である。第一章では、「新教育」について述べられている。デューイは、産業革命以前を「旧教育」、以後を「新教育」として、論じている。

「旧教育」では、家庭及び生活そのものが社会を学ぶ場であった。しかし、社会が変化した「新教育」では、そのような機能が失われつつある。だからこそ、社会を学ぶ場として、学校は社会の自己指導ということにかけて重要なのである。学校は社会の動きと合致していなければならない。「新教育」では、個人的見地と社会的見地が統合される学校が求められるのである。例えば、「新教育」を代表する一例に、手工教授があげられる。しかし、実際は、本当の意義を理解せぬまま取り入れられ、形骸化しているケース（指導案に書かれる「いきいき」などの表現。それ自体が目的となってしまう。）も少なくない。

ここで社会に目を向けてみる。社会とは、目的を共にする者同士が、協力する集合体である。そこでは、共通の必要および目的が、思想の交換の増大ならびに共感の統一の増進を促す。社会とは、根本的には共通の生産的な活動という要素を持つものである。その意味において、こんにちの学校は、社会の動きと合致していないと言える。個人的見地と社会的見地が統合されていないからである。これらは、こんにちの学校の悲劇的な弱点である。こんにちの学校では、個人的見地への偏重、きわめて自然に利己主義におちいる傾向がある。しかし、「たんなる知識の習得にはなんら明白な社会的動機もないし、それが成功したところでなんら明白な社会的利得もない。」と、知識の量だけを追い求める社会に、デューイは警鐘を鳴らす。

たんなる知識習得を乗り越える授業とは、具体的にどのようなものなのか。それは、思想の交換の増大と、共感の統一の増進が現れる授業である。そのような授業では、活動から自然と生じる混雑と喧騒がある。どこでもいそがしく活動している作業室には、ある種の不秩序がみられ、そこに静粛はない。子どもが真に学びに向かえば、教室がザワザワするのは当然のことである。そのような授業観を教師が持ち合わせていないと、学びに向かう児童のエネルギーを奪いかねない。活動から自然と生じる混雑と喧騒がある授業として、デューイは自身の実践（羊毛）を紹介している。大事なことは、このような学習を通して、子ども達一人一人に、自分の日常の仕事の内部に含まれている大きな、人間的な意義のすべてを読み取る力を身に付けさせることである。また、実践例を通して、子どもと共に問題解決を図ろうとする、共同研究者としての教師の姿。質問や暗示によって子どもを学びに向かわせる、ファシリテーターとして教師の姿が描かれており、私たちが学ぶべき姿である。

もともと学校は、質の高い労働者や、兵隊を育てるためだけの装置であった。そこでは、画一的に知識を注入するだけの、支配的な学習が展開されていた。しかし、現代の学校は違う。学校は社会の装置であるから、よりよい社会の、未来の成員を育てることが目的となる。その目的を実現する教育の在り方には、3つの方向性がある。1つは、ムチを使うこと。2つは、アメを使うこと。3つは、知的好奇心を刺激することである。我々は教育の専門職として、知的好奇心を刺激する指導の在り方を、絶えず考えなければならない。

【ESD に関して】

「生産の本能が児童期および青年期に組織的にとらえられないかぎり、すなわち、これらの本能が社会的方向において訓練され、歴史的解釈によってゆたかにされ、科学的方法によって制御され解明されない限り、われわれはたしかに現代の経済的害悪の根源をつきとめることさえもおぼつかないのであり、いわんや害悪を有効に処理することはいっそう不可能なことである。」

→経済などのシステムをとらえ、本質を見抜いていく力（システム・シンキング、クリティカル・シンキング）を身に付けることが大切である。

【感想・意見】

デューイの著書を初めて読んだ。60年前に発刊されたものなのに、現代教育の更に先をゆく主張に、ただただ驚かされた。

中澤先生が「理論を持っていると、大胆な授業改善ができる。」と教えてくれたが、その通りだと共感する。学校の仕事には際限がないので、いつまでも仕事をする事が出来る。そうすると、忙しさを理由に、毎日をただ何となくやり過ごす。その結果、教師としての成長ができなくなる。この負のスパイラルから抜け出すためにも、理論を学び、それを拠り所に実践と省察を繰り返す。理論と実践の往還によって、自己の成長を促したい。教師としての専門性を高めるために、今日のような学びの場を、これからも大切にしていきたい。

【用語解説】

- 個人的見地（子ども個人の発達を促すこと目的という学校の役割）
- 社会的見地（社会を維持する、向上させるという社会的意義を持つ学校の役割）
- 手工教授（図工などに代表される、技能系の活動を伴う学習）
- 隣保制度（隣組）
- 縦覧随意（いつでも見られる）
- 構成的思考（具体的な物を組み合わせ、より良くするにはどうしたら）
- 思想の交換の増大（意見の交換により、よりよい意見が生まれること）
- 共感の統一の増進（相互理解）
- 切実である派（デューイ）と、切実になる派（長岡文雄・有田和正）